

学会記事

I. 運営委員会報告

1. 表彰委員会による選考結果に基づいて、書面審議にて学会各賞の受賞者を承認した。
2. 2003年10月17日に立正大学熊谷キャンパスにおいて開催した。審議事項は以下のとおり。
 - ① 編集委員会による植生学会誌執筆要領の改訂(案)について承認した。
 - ② 自然史学会連合への加盟について審議し、来年度より加盟することとした。

II. 編集委員会報告

2003年10月17日に立正大学熊谷キャンパスにおいて開催し、植生学会誌執筆要領の改訂(案)を作成した。

III. 企画委員会報告

2003年10月17日に立正大学熊谷キャンパスにおいて開催し、会員アンケート集計結果に基づく今後の活動内容について審議した。

IV. 表彰委員会報告

植生学会表彰規定に基づき、平成15年6月30日までに推薦のあった植生学会功労賞および奨励賞の受賞候補者について書面審議により選考を行い、選考結果を運営委員会に報告した。

V. 2003年度総会報告

2003年10月18日に立正大学熊谷キャンパスにおいて2003年度総会が開催され、以下の事項が報告または承認された。

A. 報告事項

1. 運営委員会
 - ① 植生学会誌執筆要領の改訂(別掲1)。
 - ② 自然史学会連合への加盟。
2. 事務局(庶務関係)
 - ① 2003年10月6日現在の会員数は正会員554名、団体会員13団体である。
 - ② 2003年3月20日に第50回日本生態学会大会の自由集会として、下記テーマで群談談話会を開催した。「河川の自然再生—河川水辺の国勢調査を如何に生かすか—」。
3. 事務局(編集関係)
 - ① 2002年10月から2003年9月までの間に植生学会誌19巻2号(原著論文4編、短報1編、論文頁数58頁)と同20巻1号(原著論文5編、短報1編、論文頁数68頁)を発行した。
 - ② 2003年3月に植生情報第7号(頁数48頁)を発行した。
 - ③ 2002年10月18日~2003年10月16日の期間の投稿論文数は16編。

B. 承認事項

1. 2002年度収支決算(別掲2)
2. 2003年度収支予算(別掲3)

C. その他

1. 第9回大会開催地となる宮崎大学の伊藤哲氏より、多数会

別掲1. 植生学会誌執筆要領改訂条項

旧	新
——<前 略>——	——<前 略>——
<ol style="list-style-type: none"> 4. 和文原稿はA4版400字詰原稿用紙に横書きし、ワードプロセッサによるときは、A4版厚手の白紙に34文字・30行で打ち出し、1ページとする。なお、下部余白中央にページ番号を振ること。 	<ol style="list-style-type: none"> 4. <u>インターネット上に公開されている資料で論文中に引用できるものは、原則として情報の永続性が保たれている資料に限る。電子ジャーナル化された学術誌(紀要、プロシーディングなどを含む)の引用と、国、自治体、またはこれらに準ずる公的機関が管理しているデータベースの引用を認める。これら以外の資料を引用したいとの申し出が著者からあった場合には、編集委員会で個別に検討する。引用した電子ジャーナルは、引用文献リスト中に他の印刷物と同様の形式で記入する。ただし、電子ジャーナルの発行者が指定する書式がある場合は、その情報を必ず含むようにすること。データベースの引用にあたっては、本文の中に管理者(発行者)、データベースの名称、アドレス、参照年月を明記すること。なお、必要があれば脚注に入れることができるが、本文末尾の引用文献リストには掲載しないこと。本文中には下記の例のように記述すること。</u> <u>高山試験地の年降水量は気象庁の電子閲覧室 (http://www.data.kishou.go.jp, 2003.9 参照) に掲載されている岐阜県高山のデータを代用した。</u> <u>山火事の平均焼失面積は National Interagency Fire Center, Wildland Fire Statistics (http://www.nifc.gov/stats/wildlandfirestats.html, 2003.10 参照) のデータから算出した。</u> 5. 和文原稿はA4版400字詰原稿用紙に横書きし、ワードプロセッサによるときは、A4版厚手の白紙に34文字・30行で打ち出し、1ページとする。なお、下部余白中央にページ番号を振ること。

- | | |
|---|---|
| 5. 欧文原稿は A4 版厚手の白紙にダブルスペースでタイプし、上下は各 3 cm, 左右は各 2.5 cm 程度をあげ、約 65 文字、25 行を 1 ページとする。なお、下部余白中央にページ番号を振ること。 | 6. 欧文原稿は A4 版厚手の白紙にダブルスペースでタイプし、上下は各 3 cm, 左右は各 2.5 cm 程度をあげ、約 65 文字、25 行を 1 ページとする。なお、下部余白中央にページ番号を振ること。 |
| 6. 本文中の見出しおよび小見出しはボールドとする。 | 7. 本文中の見出しおよび小見出しはボールドとする。 |
| 7. 本文中の動・植物名の和名はカタカナ、学名（属名・種小名など）はイタリック体とする。 | 8. 本文中の動・植物名の和名はカタカナ、学名（属名・種小名など）はイタリック体とする。 |
| 8. 上記のほか、最終原稿におけるボールド、イタリック、上つき、下つきなどの指定はすべて朱書き（手書き）でおこなうこと。 | 9. 上記のほか、最終原稿におけるボールド、イタリック、上つき、下つきなどの指定はすべて朱書き（手書き）でおこなうこと。 |
| 9. 原著論文は刷り上がり 12 ページまで、総説は 16 ページまで、短報および資料は 4 ページまでは無料とし、超過分は著者の負担で掲載することができる。超過ページ印刷代は 1 ページにつき 9000 円とする。 | 10. 原著論文は刷り上がり 12 ページまで、総説は 16 ページまで、短報および資料は 4 ページまでは無料とし、超過分は著者の負担で掲載することができる。超過ページ印刷代は 1 ページにつき 9000 円とする。 |
| 10. 図、表、写真等の大きさは原則として自由とするが、投稿者の責任において作成し、挿入希望位置を本文原稿の余白に朱書きで指定すること。 | 11. 図、表、写真等の大きさは原則として自由とするが、投稿者の責任において作成し、挿入希望位置を本文原稿の余白に朱書きで指定すること。 |
| 11. 図、表、写真等のカラー印刷は所定の料金とし、著者の負担とする。 | 12. 図、表、写真等のカラー印刷は所定の料金とし、著者の負担とする。 |
| 12. 図の説明は別紙にまとめて書き、その紙には本文に続くページ数を打っておくこと。 | 13. 図の説明は別紙にまとめて書き、その紙には本文に続くページ数を打っておくこと。 |
| 13. 表の説明は表の上部に書くものとする。 | 14. 表の説明は表の上部に書くものとする。 |
| 14. 1 ページにおさまらない表は、著者の負担で折り込みとすることができる。 | 15. 1 ページにおさまらない表は、著者の負担で折り込みとすることができる。 |
| 15. 原図、写真等は原稿受理後に、編集委員会の指示に従って送付すること。その際に本文、表、図の説明等を入力したフロッピーディスク、CD、MO 等（アプリケーションの形式だけでなくテキスト形式のものも入れること）を添えること。コンピューターで作成した図やデジタル化された写真がある場合は、これも入れること。 | 16. 原図、写真等は原稿受理後に、編集委員会の指示に従って送付すること。その際に本文、表、図の説明等を入力したフロッピーディスク、CD、MO 等（アプリケーションの形式だけでなくテキスト形式のものも入れること）を添えること。コンピューターで作成した図やデジタル化された写真がある場合は、これも入れること。 |
| 16. 写真は原則的にプリントした陽画とするが、ポジのスライドフィルムやデジタル化されたものがある場合は、最終原稿提出時にそれも添付すること。 | 17. 写真は原則的にプリントした陽画とするが、ポジのスライドフィルムやデジタル化されたものがある場合は、最終原稿提出時にそれも添付すること。 |
| 17. 別刷は 1 論文につき 50 部を無料で受け取ることができる。これを超える別刷りは実費を著者が負担して作成する。別刷りの必要部数（無料分を含む）を 50 部単位で投稿原稿送付状に明記する。 | 18. 別刷は 1 論文につき 50 部を無料で受け取ることができる。これを超える別刷りは実費を著者が負担して作成する。別刷りの必要部数（無料分を含む）を 50 部単位で投稿原稿送付状に明記する。 |
| 付則 1. この要領は 2002 年 10 月 19 日以降に投稿された原稿に適用する（2002 年 10 月 18 日改訂）。 | 付則 1. この要領は 2003 年 10 月 18 日以降に投稿された原稿に適用する（2003 年 10 月 17 日改訂）。 |
| 付則 2. この要領の改訂は、植生学会編集委員会の議を経て、運営委員会の承認を得て行うものとする。 | 付則 2. この要領の改訂は、植生学会編集委員会の議を経て、運営委員会の承認を得て行うものとする。 |

別掲 2. 植生学会 2002 年度収支決算

(単位: 円)

収入の部	予 算	決 算	差 異	備 考
前期繰り越し	3,846,333	3,846,333	0	
会費	3,244,000	2,079,000	1,165,000	
雑収入				
バックナンバーなど	300,000	182,000	118,000	
利息	500	31	469	
計	7,390,833	6,107,364	1,283,469	
支出の部				
本誌刊行費	1,700,000	1,638,511	61,489	
情報誌刊行費	300,000*	262,500	37,500	*植生情報第 6 号
送料	250,000	90,514	159,486	
学会事務局経費	400,000	429,498	-29,498	
編集事務局経費	150,000	116,897	33,103	
情報誌編集費	40,000	7,900	32,100	
企画委員会経費	100,000	26,150	73,850	
大会補助費	250,000*	250,000	0	*第 7 回大会分
予備費	4,200,833	13,610*	4,187,223	*印章代ほか
計	7,390,833	2,835,580	4,555,253	
収支差額(繰り越し)	0	3,271,784	-3,271,784	

別掲 3. 植生学会 2003 年度収支予算

(単位: 円)

収入の部		2003 年度	2002 年度	差 異	備 考
前期繰り越し		3,271,784	3,846,333	-574,549	
会費		3,462,000	3,244,000	218,000	
雑収入					
バックナンバーなど		300,000	300,000	0	
利息		500	500	0	
計		7,034,284	7,390,833	-356,549	
支出の部					
本誌刊行費	850,000 円×2 回	1,700,000	1,700,000	0	
情報誌刊行費	300,000 円×1 回	300,000*	300,000	0	*植生情報第 7 号
送料		250,000	250,000	0	
学会事務局経費		400,000	400,000	0	
編集事務局経費		150,000	150,000	0	
情報誌編集費		40,000	40,000	0	
企画委員会経費		100,000	100,000	0	
大会補助費		250,000*	250,000	0	*第 8 回大会分
予備費		3,844,284	4,200,833	-356,549	
計		7,034,284	7,390,833	-356,549	
収支差額(繰り越し)		0	0	0	

員の参加が要請された。

VI. 学会表彰について

2003年度の学会各賞の受賞者は以下のとおり(敬称略)。表彰は2003年10月18日の総会において行われた。

学会賞 該当者なし
奨励賞 安島美穂, 西尾孝佳
功労賞 奥富 清, 菅沼孝之

VII. 植生学会第8回大会報告

植生学会第8回大会が、2003年10月17日から19日にかけて立正大学熊谷キャンパスにおいて開催された(下記日程)。一般講演では口頭38題、ポスター25題の発表が行われた。参加者は予約申込者143名、当日参加者64名の計207名であった。

10月17日: 各種委員会, 運営委員会
公開講座「地形からみた植生・植生からみた地形」(田村俊和/立正大学地球環境科学部)

10月18日: 一般講演(口頭発表・ポスター発表), 総会, 懇親会

10月19日: エクスカーション(東大秩父演習林コース, 国営武蔵丘陵森林公園コース)

一般講演は以下のとおりであった。

<口頭発表>

- A01 竹原明秀(岩手大). シベリア・チャニー湖周辺の植生。
A02 沖津進(千葉大). ナミビアにおけるサバンナ植生景観の変化。
A03 加藤ゆき恵・富士田裕子(北海道大). 国後島古釜布の湿原におけるムセングの生育環境。
A04 寺下史恵(㈱地域環境計画)・石渡一江・藤本哲久・波田善夫(岡山理大). 地質・地形と植生—岡山県御津地域における花崗岩地域と堆積岩地域の比較—。
A05 太田謙(岡山理科大)・森定伸(㈱ウエスコ), 波田善夫(岡山理大). 50 m メッシュDEMを用いた香川県小豆島の現存植生と地形・地質。
A06 森定伸(㈱ウエスコ)・波田善夫(岡山理大). 植生図作成のための地質・地形情報—香川県大川山周辺における事例—。
A07 原慶太郎・須崎純一・鎌形哲稔・安田嘉純・朴鍾杰(東京情報大). リモートセンシングによる異なったスケールの植生把握。
A08 大野啓一(横浜国大)・宋鍾碩(韓国・安東大). 環日本海地域に分布するナラ林の植生分類体系。
A09 島田直明(岩手県立大). 岩手山麓における防風林の種組成について。
A10 斉藤修(中京大)・星野義延(東京農工大). 北関東のシイタケ原木林(コナラ二次林)の林分構造と管理形態が林分スケールの種多様性と種組成に及ぼす影響。
A11 村上雄秀・林寿則・矢ヶ崎朋樹(国際生態学センター). 福井県武生市西部の植生—遷移度を用いた地域植生の序列化の試み—。
A12 加藤順(岩村田高校)・林一六(筑波大学). アカマツ林からミズナラ林への遷移過程の量的側面。
A13 長島康雄(仙台市天文台)・平吹喜彦・長谷川巧(宮城教育大). 樹型評価からみた老齢防潮林で分布拡大している

シロダモの位置付け。

- A14 渡邊定元・橋本和昌・浅香亘(立正大). 荒川中流域エノキ河岸林の群落構造。
A15 福井美月・安齊美帆・神戸友子・渡邊定元(立正大). 国営武蔵丘陵森林公園における二次林の遷移段階とその林型。
A16 高柳絵美子・上條隆志(筑波大)・小川みふゆ(科学技術振興事業団)・津山幾太郎(筑波大). 本州中部奥鬼怒地域の針広混交林における主要構成樹種の更新様式。
A17 若松伸彦・菊池多賀夫(横浜国大). 林床タイプの異なるオオシラビソ林におけるオオシラビソの成長パターンの違いについて。
A18 波多野玄・吉川正人・福嶋司(東京農工大). 関東南部太平洋側ブナ林における種組成の季節変化の比較。
A19 大野啓一(千葉県立中央博). 暖温帯におけるタニギキョウのフェノロジー。
B01 阿部聖哉・梨本真・竹内享・松木吏弓・石井孝(電力中央研究所). 秋田駒ヶ岳のイヌワシ行動圏における植物群落。
B02 大橋春香・星野義延(東京農工大)・大野啓一(千葉県立中央博). 奥多摩におけるニホンジカの生息密度増加に伴う植生の変化。
B03 崎尾均(埼玉県農林総合研究センター). 溪畔林構成樹種に及ぼすニホンジカの影響。
B04 川西基博(横浜国大), 石川慎吾(高知大), 島津弘(立正大), 大野啓一(横浜国大). 上高地の河畔林における林床植生の種組成と微地形との対応関係。
B05 石川慎吾・柳川智世・江角麻希子・三宅尚(高知大). ノイバラの生態学的特性と河川の砂礫堆における分布拡大様式。
B06 野寄玲児・早田祥子・久田真理(神戸女学院大). 近畿地方北部の河川上・中流域におけるツルヨシ群落の種組成。
B07 川原照彦(西日本技術開発(株)). 河口域植生の遷移〜諫早湾に流入する本明川における植生の変化について。
B08 島瀬頼子(自然環境研究センター). 多摩川永田地区における造成河原に成立した植生。
B09 村上雄秀・矢ヶ崎朋樹・鈴木伸一(国際生態学センター)・安部聖哉(電力中央研究所). 都市河川における河辺植生の回復に関する研究 I—福井市周辺の河辺植生類型—。
B10 矢ヶ崎朋樹・村上秀雄(国際生態学センター)・安藤彰則(バーズデザイン)・坂田正宏(福井県自然保護課). 都市河川における河辺植生の回復に関する研究 II—自然再生実験地での2ヶ年の植生動態—。
B11 北村直也・星野義延(東京農工大). 多摩川中流域における河川堆積物のシードバンク。
B12 安島美穂・荒木佐智子・後藤章・鷺谷いづみ(東京大). 渡良瀬遊水地における湿地植生復元のための中規模シードバンク調査。
B13 池田浩明(農環研). 絶滅危惧植物タコノアシの種子水散布特性の個体群間変異。
B14 栗山みどり・森定伸・渡辺敏(㈱ウエスコ)・榎本敬(岡山大)・角野康郎(神戸大)・國井秀伸(島根大)・波田善夫(岡山理大). 汽水性沈水植物イトクズモの生態と保護・保全—岡山県南部淡水干拓地での事例—。

- B15 原田昭・迫田昌宏(中外テクノス㈱), 四国東南部の水田雑草群落について.
- B16 根本真理・星野義延(東京農工大・農), 里山地域における植物の種多様性と群落多様性の関係(2)ー水田耕作の有無による比較を中心にー.
- B17 桑原佳子((社)大分野生生物研究センター), 久住高原における草原の保全・復元の試み(第4報).
- B18 須藤悠太・星野義延(東京農工大), 奥多摩地域への来訪者による種子の持ち込みが路傍植生に与える影響の可能性.
- B19 大和田学, 佐々木寧(埼玉大), 都市内の植栽帯の防火機能の有効性と限界.
- <ポスター発表>
- P01 白石貴子・齊藤範子・渡邊定元(立正大), 斜面方位による光環境の違い.
- P02 齊藤範子・白石貴子・渡邊定元(立正大), 斜面方位によるコナラ葉の光吸収の違い.
- P03 森山輝久・渡邊定元(立正大)・芝野伸策・大屋一美・鈴木憲(東京大), 階層を異にしたウダイカンバ, ミズナラ, トドマツ3種の空間分布および光環境.
- P04 小林誠・森山輝久・渡邊定元(立正大)・北畠琢郎(森林環境研究所), 分布最北限ツバメの沢ブナ林における植生構造の16年間の変化.
- P05 江島淳・中村徹・上條隆志(筑波大), 冷温帯域における急傾斜地の群落構造.
- P06 永松大・小南陽亮・齊藤哲(森林総研・九州)・佐藤保・金谷整一(森林総研)・手塚賢至(ヤクタネゴヨウ調査隊), 林分構造からみたヤクタネゴヨウと混交樹種の競合関係.
- P07 金谷整一(森林総研)・玉泉幸一郎(九州大)・伊藤哲(宮崎大)・齊藤明(九州大), 屋久島におけるヤクタネゴヨウ林分の種組成.
- P08 肥後睦輝・佐藤洋美(岐阜大), 都市近郊二次林におけるコシアブラ個体群の動態.
- P09 伴邦教・武田義明(神戸大)・宋鍾碩(韓国・安東大)・中川重年(神奈川県自然環境保全センター)・譚学仁(中国遼寧省森林経営研究所), 中国遼寧省におけるモンゴリナラ二次林の種組成.
- P10 島田豊・荒木眞之(筑波大), スギ人工林の間伐による林床の種組成と種多様性の変化.
- P11 澤田佳宏・津田智(岐阜大), 徳島県鳴門市の海浜における防波堤工事後の植生回復.
- P12 関岡裕明(㈱テクノグリーン)・亀山順子・中本学(大阪ガス㈱)・下田路子(東和科学㈱), ササ草原からススキ草原への転換と維持管理.
- P13 西崎有佳子(北海道教育大)・高橋和成(岡山一宮高), 親しめる校庭雑草群落づくりの検討.
- P14 中西弘樹・田尻夏紀(長崎大), イネ科植物が優占した群落とその種子生態.
- P15 渡邊幹男(愛知教育大)・櫛田敏宏(愛教大附属高校)・二橋由美(愛知教育大)・浅井常典(豊明市教育委員会)・芹沢俊介(愛知教育大), 人為的に遺伝的浮動を起こしてしまった絶滅危惧植物ナガバノイシモチソウ集団の復元(2)ー遺伝的多様性の復元は可能かー.
- P16 玉谷雄太(筑波大)・小幡和男(茨城県自然博物館), 茨城県小貝川における河床部微地形とキタミソウの生育分布との関係.
- P17 森本浩輔・佐々木寧(埼玉大), サクラソウ個体群動態の画像解析.
- P18 周進(中国科学院武漢植物研究所)・橘ヒサ子(北海道教育大), 北海道勇払湿原の土地利用・被覆変化.
- P19 雷耘・大野啓一(横浜国大), 暖温帯沖積低地に分布するハンノキ林の植生とその成長動態.
- P20 加藤瑞樹・藤原一繪(横浜国大)・荒木俊幸(福井高専), 岩質切土のり面の微地形に成立する植生の植物社会学的研究.
- P21 小川政幸・上條隆志・荒木眞之・黒田吉雄・北片千晶・曾根祐太(筑波大), ハヶ岳演習林の湿原・湿地林・ミズナラ林における地上部現存量・純一次生産量・リター量の比較.
- P22 伊藤哲・光田靖(宮崎大), 九州のブナ林の分布に関する立地解析ー気象・地質・地形および植生データを用いた解析事例ー.
- P23 清原諭高・上條隆志・加藤拓(筑波大)・島田和則(森林総研)・羽柴敬子(筑波大), 三宅島2000年噴火後3年間の植生変化.
- P24 内山慶之・磯谷達宏(国土館大), 伊豆半島南東部の新第三系と第四紀火山における二次林の分布と組成.
- P25 尾澤彰(埼玉森林サポータークラブ)・渡邊定元(立正大), 蛇紋岩立地と結晶片岩立地におけるコナラ・リョウブ・ミツバツツジのecological nicheとhabitat.

VIII. 第3回植生学会シンポジウム報告

2003年5月31日に, 東京農工大学との共催, 東京都三宅支庁, (社)日本環境アセスメント協会, (財)森林文化協会の後援で, シンポジウムを開催した. 会場は東京農工大学農学部(東京都府中市), 参加者は約200名であった. プログラムは以下のとおり(詳細は植生情報8号に掲載予定).

テーマ「よみがえれ三宅島の緑ー植生回復への試みと課題ー」
第一部 <基調講演>

伊豆諸島の植生と三宅島(星野義延/東京農工大学)

第二部 <三宅島の緑回復へのアプローチ>

緑回復への行政からのアプローチ(市村邦之/東京都三宅支庁)

土砂生産の現状とその対策(阿部和時/森林総合研究所)

植生の現状と自然回復について(上條隆志/筑波大学)

植物の遺伝的な固有性を守る(津村義彦/森林総合研究所)

第三部 <総合討論>

IX. 公開学術講演会の後援について(報告)

(社)日本動物学会の主催で2003年7月12日に東京大学においておこなわれた, 公開学術講演会「三宅島の自然と復興ー現状とこれからー」の開催を後援した.

X. 学術会議第19期会員候補者の推薦について(報告)

2003年3月12日付けで, 日本学術会議第19期会員候補者として林一六氏を推薦したが, 2003年5月におこなわれた推薦人会議において, 会員候補者には選出されなかった.

XI. 科学研究費補助金の審査委員候補者推薦について（報告）

2003年4月に日本学術会議より科学研究費補助金の審査委員候補推薦の依頼があり、植生学会からは細目「生態・環境生物学」に候補者2名、細目「環境影響評価・環境政策」に候補者1名と予備候補者1名の計4名を推薦した。